駿府城公園

この公園は、16世紀末に徳川家康公が築いた駿府城があった場所である。現在は、石垣と当時の天守閣の基礎部分、堀の一部が残っているのみだ。櫓と門は17世紀の設計図に基づいて再建された。公園の中央付近には徳川家康公の銅像があり、その向かいには家康公が自ら植えたとされるミカンの木がある。公園の北東部には、伝統的な回遊式庭園である「紅葉山庭園」がある。園内には多くの広場や2つのプレイエリアがあり、南側外周には屋台が並んでいる。

歴史

家康公は、1580年代後半に駿府城を築城した。1590年に、すぐに関東へ移るよう命じられた。1605年に將軍職を退くまでは、江戸に拠点を置いた。その後、駿府に戻り、隠居しながらも権力を保持し、駿府城から日本を実質的に支配した。家康公は1607年に大改修を命じ、天守閣を大きくし、屋根瓦を貴金属で覆った。外国からの使節を迎えるのにふさわしい場所であった。

1635年、町を出火元とする火事により城の大半を焼失。その後、いくつかの建築物のみが再建された。19世紀後半、城は軍に譲渡されたが、これは当時の日本各地の城に共通する運命であった。敷地は平らにされ、陸軍の兵舎として使われた。第二次世界大戦後、城跡は市が買い取り、スポーツや市民の憩いの場として再び生まれ変わった。

東御門と巽櫓

東御門は、要人が使用した玄関口だ。隣接する巽櫓とともに、防衛の要所であった。現在は、1638年に再建された図面をもとに再建されている。城の内外には、数世紀にわたる城の歴史や遺品が展示されている。

坤櫓

150年以上ぶりに再建された角櫓であり、防衛の要衝。梁や建具が見える天井や床など、日本の伝統的な建築様式を紹介する展示室として機能している。

天守の石積み

1580年代後半に建てられた天守閣と、それよりはるかに大きかった1600年代前半に建てられた天守閣の石造りの基礎が、発掘調査によって明らかになった。さまざまな様式の石垣や石垣の内側を見ることができる貴重な場所である。

紅葉山庭園

池を中心に、曲がりくねった小道、木造の建物と自然が織りなす伝統的な日本庭園。里、海、山里、山の4種類の風景が表現されている。富士山のミニチュアや三保の松原の海岸線が特徴的です。